川湯の森病院物語

新病院建築から始まった革命！

齋藤　浩記

北海道 医療法人共生会 川湯の森病院 理事長／社会福祉法人てつなぎ 理事長／清里クリニック 院長

Key Words　共存共栄，自給自足，木造の病院建築，再生可能エネルギー，新たな医療財源構築

共生会の法人理念

当法人の理念は「共生会」（ともにいきるかい）と読んで字のごとくであり，患者およびその家族と共に，スタッフおよびその家族と共に，地域社会と共に，自然と共に，と大きく4つの「共に生きる」という意志が込められている（図1）。

本当は，「生きる」というより「喜ぶ」や「栄える」といったニュアンスを込めたかったのだが，医療法人の名称としては，「生きる」のほうが適当と考えた。「生きる」とは，本来は「喜ぶ」「楽しむ」「栄える」等々，一言で「幸福」に通じる意味合いを含むと認識している。そして，それが永続性をもつように，災害時や経済的混乱時等，社会の変動においてもびくともしない盤石な体制を整えることを目標に，できることから実現していこうと考えており，そのためのキーワードに「自給自足」というコンセプトがあり，とくにエネルギーと食についてのそれを第一段階としている。国外に依存しなければならないエネルギー源である「灯油」や「重油」を暖房システムに用いないということは，その1つである。

当院の所在地とその地域の特性，木造建築とする意義

当院の所在地は，川湯温泉という場所である。この温泉は，俗に言う「恋の病以外はすべて治る」というような名湯であり，かつてのアイヌの方の文化には避寒地としての歴史がある。そして，昭和の大横綱である大鵬の生まれた地域でもあり，

図1　人と自然の和を表現したロゴマーク

当院は大鵬の実家の隣地に建っている。

気候については，夏は35度を超える日もある一方で，冬は−30度以下になる年もあり，とくに1月後半から2月いっぱいまでは−25度以下になる年が多い。雪についても多い時は一晩で2mほど積もることがあり，寒暖の差が激しく，風雪も厳しく，世界でも有数の厳しい気候条件の地域と言えるだろう。

さらに，川湯温泉の熱源となっている硫黄山の影響で，空気中に存在する硫化水素または亜硫酸ガスの濃度が高く，いわゆる『硫黄のにおい』が常に感じられており，金属については，金とプラチナ以外はすべて錆びてしまう。たとえば，ティファニーのジュエリーや銀や銅の食器などは，外気に触れた状態で置いておけば1週間もすると真っ黒になってしまう。

そのような場所であるので，建築においても，他地域よりもコンクリートが中和しやすいという欠点を極力さらけ出さないように，しかも自然と一体感を感じられるように，構造体としての主役を木造にした。

経営の継承と建て替えに至る経緯

筆者が現在の理事長に就任したのが平成19年5月であった。その約半年前の平成18年11月，埼玉県の大宮にてメンタルクリニックを開業したばかりだった。北海道には縁もゆかりもなく，筆者の「浩記＝こうき」という名前の音が大鵬親方，すなわち「大鵬幸喜」からとられたという，コジツケのようなご縁だけであった。そのため，よく聞かれるのである。「なぜ北海道に行ったのか？」と。

経緯をお伝えすれば長くなるが，当時の医療法人社団平成会川湯温泉病院（旧名）には「白い巨塔」ならぬ「黒い巨塔」というような民間病院の経営運営の背後に存在する課題が勢ぞろいしているかのような状況があり，前経営者より知り合いの弁護士を通じてその解決と経営の継承を依頼された。何も火中の栗を拾う必要はなかったのだが，病院を初めて見に行った際に放っておけず，引き受けたのだ。実を言うと，その課題の1つとして大変な裁判を抱えており，その内容たるや顧問弁護士事務所の担当の若い弁護士の談で「あらゆる方面への対応能力を身につけさせてもらった」との感想が出るほどの係争であった。

初めて降りた釧路空港から川湯温泉病院までは約100km離れており，途中は信号もほとんどなく，対向車も少なく，エゾ鹿やキタキツネ，タンチョウ鶴，牧場で放牧されている牛，馬，そういった光景しかないのだ。首都圏で言えば，100kmといったら東京から高崎や宇都宮ほど離れているわけで，その道中に病院はたったの3つ，診療所もまばらにいくつかあるだけなのである。そして，抱えている課題の大きさもさることながら，病院の暗い雰囲気は，それはそれはまるで幽霊屋敷であった。現在の事務長の顔は抑うつそのものであり，筆者が継承を断ったら，この病院はどうなってしまうのか？という気持ちにかられた。大宮の診療所は開業してから半年で損益が安定しかかったばかりであったが，埼玉で筆者が診療を減らすよりも川湯温泉病院がなくなることのほうが社会的な影響は大きいと考え，継承することを決断したのだ。帰って妻にその気持ちを伝えたところ，案の定，「あなただけで行ってね」であった。

こうして，経営を継承すると同時に被告になってしまったのだが，その後はさまざまな紆余曲折を経て，すべてが円満に解決に至った。平成21年には法人名を「共生会」と変更し，病院名も「川湯の森病院」として新しいスタートを切り，同時進行で新時代の幕開けの象徴として新病院建築を計画していったのである。

途上，裁判と同時進行で新病院建築と埼玉での診療と静岡への研修にも行っていたので，多い時には首都圏と静岡と川湯とを週に3回往復するということもあり，末っ子の娘からは「お父さんまた来てね」と言われる始末（「オジサンまた来てね」よりはマシだが…）であった。やがて，幼少期は子どもと一緒にいたほうがよいと妻が考えてくれ，平成24年の新病院落成と同時期に家族そろって移住し，今に至っている。

精神医療に対する僻地の療養病床の役割

当院は長期療養型病床群100床を有しており，精神科領域としては認知症の方の入院が大変多くなっている。入院に至る経路としては，精神科的な経路というよりは，一般病院においてある程度の治療が終了した後の長期療養先として選択されることが大半であるほか，地域に精神科病院が少ないため，精神科専門スタッフが在籍している当院に地域からの要請で，いわゆる純然たる精神疾患の方が入院する場合もある。当然ながら閉鎖環境での入院ではないため，閉鎖環境下での治療が必要となる場合は，先日も日精協・総合情報委員会委員の清水輝彦先生には無理をお願いしてしまったが，精神科病院に紹介・転院となる。病状安定の後には再入院となるケースもある。

こういった地域医療における位置付けが背景にあるため，メンタルケアという側面から見た病院建築自体の有する作用も視野に入れねばならず，コンクリートよりも五感に作用する木材，とくに無垢材を用いることにこだわった（写真1）。

これまで，認知症を筆頭に，うつ病，統合失調症，不安障害，解離性障害，器質性精神障害，摂食障害，アルコール依存症，精神遅滞等の入院があり，それぞれ改善，安定が図られてきた実績が

写真1　無垢材を用いた外来エントランス

写真2　厳冬の雪が降るなかでの建設作業

ある。なかには，摂食障害の方や解離性障害の方が4人部屋で一緒になった高齢の患者との触れ合いから“心のふるさと”のように感じるようになり，病状がすっかり改善して退院後に面会に来るということもある。

また，障害者支援を行っている「社会福祉法人てつなぎ」の理事長も筆者が兼務しており，そちらを利用している患者の病状安定のための入院も受け入れ，後述する農園の運営では施設外就労も受け入れており，いざという時の駆け込み寺的な役割も有している。患者や利用者の中には，病状改善後に障害者施設の職員になったり，当院の正職員となって生活保護を外れる者，あるいは親の援助から完全に自立して将来を夢見る者もいる。

寒冷地での病院の建築－工期の厳しさ

病院経営において，利益は他業界と違って青天井ではない以上，ことに民間病院として建築費用は豊臣秀吉のように「好きなだけかけさせろ」というわけにはいかない。特殊建築物であり，その存在自体が患者にとって，働く人にとって，地域にとって，平時も有事も社会資源として重要である病院の建築である。当然のことながら，高い質を有しながら妥当な費用に収まるようにしなければならないし，その他にも兼ね備えなければならない要素が盛りだくさんである。

木造の病院建築ということで，ご縁があって医療福祉建築の重鎮の方からの紹介で，木造建築の専門家で街づくりを得意とする方に設計を依頼した。また，農林水産省，国土交通省，経済産業省の助成も受けることになり，町も条例を変更して借り入れの利子分を負担してくれ，大きな一歩を踏み出した。

見積もり合わせに参加した大手，準大手，その他地元のゼネコン施工会社は全部で14社であり，最終的に戸田建設に決定した。病院建築（病床数）では日本一の会社であるが，木造建築の病院であるうえに，灯油，重油を使わない暖房システムを有するとなると，さまざまな課題があった。助成金の申請の関係で着工は8月となり，12月頃には気温が日によっては－10度以下になり雪も降ってしまう可能性があるため，工期としては厳しいものであった（写真2）。1月，2月は最も寒い時期となり，職人は防寒対策をしてはいるが，工事のクオリティに影響が出るだけでなく，天候によっては工事が遅れる。なんとしても基礎工事は積雪前に終わらせ，1月には内装にとりかかりたいというのが施主，設計事務所，施工会社の共通の願いであった。そのような緊迫した日々のなか，特製の甘酒や豚汁を出したり，景気づけの酒を一杯やったり…と密度の濃い数カ月間が過ぎ，無事に平成24年4月には竣工，落成式典も盛大に行われ，新しい時代が切り拓かれたのであった（写真3）。

建築のシステム概要

建築システムについて述べる。

写真3　新病院正面外観

1．環境基本性能の向上と高い対災害性能を目指し，くわえて長期療養を，すなわち「もう1つの自分の家」となるように，患者への“安心”や“癒し”につながるようにした。

木構造，木質空間を形にすることで，木の視覚的なぬくもり，聴覚的には柔らかな音の伝わり方，嗅覚的には特有のやさしい芳香に包まれるようになっている。また，対災害性能や避難性能についても考慮し，中心部分はRCとすることで水平力を負担させ，木造部分には耐力壁が少なくなるようにした。コスト面から大断面を用いず，一般住宅に用いられているのと同等の規格製材を用いながらも，地震や積雪，暴風に対して極めて強い構造とした。実際に新築後に何度か震度4の地震に見舞われたが，ゆりかご程度の揺れであった。

高断熱，高気密を実現した。開口部もサッシは当然ながら木造とし，次世代基準を満たしている。しかも，温泉熱から熱をとった暖気による緩やかな床暖なので，非常に柔らかい暖房システムであるため快適である（写真4）。外気温が−30度であっても室内は25度ぐらいには保たれており，みな半袖で過ごしている。地元の方は20度では寒いという感覚であり，実はちっともエコではない気がするが，温泉熱だからまあよいかと思っている。北海道では冬のほうがアイスやビールの売り上げが多いと聞く。いずれにしても，本州からの方が抱いている「寒い」という印象は皆無である。もちろん，筆者自身も年中半袖である。

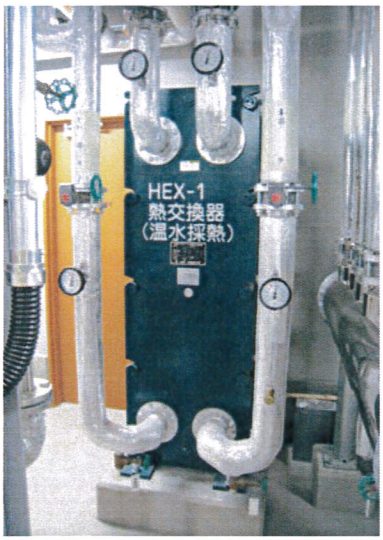

写真4　温泉熱を利用した暖房システム

2．地域の自然エネルギーを有効活用した。温泉熱と井戸水の有効利用をしている。

数年前に原油や穀物が暴騰した時期があった。その時の灯油，重油の費用は莫大で数千万円となり，「札束を燃やしている」という表現が適切かと思われるほどであったが，現在のこのシステムのおかげで，資金をより人材確保に向ける等ができるようになった。ただし，いまだ熱の不足分はヒートポンプを用いて補っているので，さらに湯量を確保して暖房システムの温泉熱での完結を目指してい

写真5　熱不足分を補うヒートポンプ設備

写真6　道産カラマツの規格材を利用

る（写真5）。

また，敷地内は数十メートル掘削すれば摩周湖の伏流水が毎分数百リットルも自噴するので，その井戸水をトイレ等の飲料以外の水資源として利用しているほか，夏期には冷房にも活用している。これによって，当然ながら水道料金は下がるし，いずれは自給自足の一環として飲料水として整えていきたい。

3．地域の資源を有効に活用し，地産地消等，地域への貢献と調和を目指した。

病院としては小・中規模だが，木造建築としては大きいほうである。よって，空間をつくるに当たって大断面集成材を用いることが適当であった。しかし予算制約があるので，木材から金具類に至るまで一般住宅用に流通している規格の材料で建築できるようにした（たとえば，柱は120mm × 120mm，梁は幅135mm以下×梁成450mm以下×長さ6m以下）。これにより，コストダウンと同時に地域の林業や建築への波及，普及効果を見込んだ（写真6）。

木材については，道産材としてのカラマツ，トドマツを主体にし，外壁も大和張りとした。色合いについても周囲の白樺や楡，ナラ，カラマツ，トドマツ等の豊富な森林と調和するように土と木の色に近づけた。

4．増築や関連施設の設置・建設を念頭に置き，街づくりに発展していくようにした。

新病院建築後に展望していた事業展開からは，新築時にできなかった設備の増設や増築も含め，人や施設が増えることを予想し，敷地内あるいは近隣の開発を常に念頭に置いた土地利用，意匠，機能とした。

結果として平成26年3月には，当初の予算制約上において法的には不要ではあっても設置したかったスプリンクラーの増設も行い，管理棟を同様の意匠で増築，晴れて理事長室も出来上がった。外壁についても放火対策として病院周囲全体に高感度熱センサー付きの監視カメラを設置した。これらをスムーズに行うことができた。また，本年5月には敷地内の整備により29床の住宅型有料老人ホームが完成し，増え続ける地域の在宅医療や介護のニーズに応える形となった（写真7）。

さらに電気の自給を目指し，本年10月には，北海道電力のシステムの混乱をきたさない最低限の自給目的の太陽光発電50whも設置することが決定している。

当初予想していた通り，現在の職員は町外からの，とくに札幌圏や本州からの移住者も多いため，寮もいっぱいになり，アパート建築も行った。人口約1,000人前後の弟子屈町川湯地区において，当法人および関連会社の職員数は約200人近くであり，近くに保育所

写真7　老人ホーム「森の家しらかば」

写真8　病院敷地内のビニールハウス栽培「スイカトンネル」

と小学校ほか，警察，消防署，郵便局，そして温泉郷の旅館群等があるため，今後もさらなる街づくり，地域づくりに通じると意識している。

川湯温泉病院から川湯の森病院への変身

新病院建築後より，狙い通り，病院全体のイメージは様変わりを遂げた。当法人の理念に共感し，現実にそのコンセプトが詰まった建物を目の当たりにし，以前より質量ともにはるかに勝る人材が集まってきた。療養病床でありながら医師も充足し，2つの大学の医局との関係も築かれている。その他の医師も勤務を楽しみにしており，時に家族や友人を連れてくる。また，看護部長は愛知県から着任し，看護師も以前の倍となっている。リハスタッフも，リハビリ専門医が勤務しているうえに，PT，OT，STの全職種がそろった。その他にもMSW，PSW，ケアマネ，放射線技師，臨床検査技師，管理栄養士と次々に専門職が集い，展開できる業務の幅は以前とはまったく比較にならない。

振り返れば，建築計画を練り始めた最初の頃，若い看護師と臨床工学士の夫婦の着任から始まり，そこから流れが変わっていったことが思い起こされる。組織も生き物，事業体も生き物のようであり，どういった展望を抱くかが非常に大切と感じさせられる。

筆者が経営を継承した当時，医師はなんとかつないでいた状況であったし，リハスタッフも福祉職もおらず，看護助手にしても介護福祉士は非常に少なく，管理栄養士もいなかった。現在はスタッフの数だけみても以前のほぼ倍の人数であり，若い世代も多くなったため，地元の保育園や小学校には当法人の職員の子弟が多く通っている状況である。“事務長は抑うつ”で“幽霊屋敷”のような雰囲気は180度変わった。実際に“抑うつ”だった事務長は今では縁側で日向ぼっこしている好々爺のようになっており，以前と比較したら「天国と地獄」だと語っている。

山葡萄，コーヒー，米の栽培

病院ながら“農園課”という部署があり，温泉熱によるビニールハウスを主体に野菜や果物を栽培している。病院で用いる野菜や果物の多くは自家栽培であり，有機・無農薬をモットーに作り，寒暖の差の激しさのおかげで甘くて美味しい野菜・果物が収穫されている（写真8）。

また，自生する山葡萄の収穫と栽培によるオリジナルワインも手がけており（写真9），今年で2回目となるオリジナルワインは「和＝En」という名称で商標も登録し，関連事業として酒販業の許可を待って販売予定である（図2）。旧病院の建物もいずれはワイナリーに改装し，味噌や醤油も醸造する食糧基地にしてしまおうという計画を立てている。

そして，今年はより一層驚きの年になった。4

写真9　オリジナルワイン用の山葡萄

写真10　障害者施設からの就労者と実をつけたコーヒー苗を囲む

図2　オリジナルワインの名称デザイン

年前，病院の新築時に植えたコーヒーの苗が育ち，とうとう実がついたのである（写真10）。さらに，米もビニールハウスの入り口で半露地の形で試験栽培してみたのだが，これも穂をつけた。そのほか，次々と新たな作物の栽培を計画している。

新たな経営・運営の形づくりへの展望－医業外収益による経営基盤構築

エネルギーについては温泉熱および太陽光発電等を用いて自給自足を実現したい。農園で食の自給自足を実現し，農業の六次化も図る予定である。その中で付加価値を高めた商品開発と各事業の日本および世界市場への参入という将来像を描いている。くわえて摩周湖，屈斜路湖に囲まれた大自然と共生しながら癒され，明日への活力を得るような医療・保健・介護・福祉・教育等を絡めたヘルスケアツーリズムの形を展望している。これらは医業外収益を得るための事業展開のほんの1つの案だが，いずれにしても，どのような社会情勢の下でも盤石な事業を展開し，日本の素晴らしい文化を世界に発信したいと考えている。当然ながら，そこには介護や福祉も関係して患者，利用者もサービス提供に関わることで自立心が高まったら素晴らしいと感じている。

現在，それらの実現に通じる医療関係以外の人材も集い，あるいは人脈が広がってきている。金融，農業，漁業，料理人，建設設備関連…と，背景の異なる人と人が出会い，同じ方向に向くことで，まるで化学反応を起こすかのような新たな道が拓かれていくと確信している。

そして，今後の私たちの業界にとって，自己負担の増加か？ あるいはさらなる増税か？ いや，保険診療自体も危機にさらされつつある昨今の情勢のなかで，当法人の試みが何か解決策の一助足り得ることができればこれほどの喜びはない。さらなる精進を重ねて参りたいと思う。